

## UI ゼンセン同盟 常任中央執行委員・労働条件局長 矢鳴 浩一

フィリピンといえば、マンゴー。そして人々の寛容な心持である。日本人が醤油をよく使うように、フィリピン料理は、マンゴーなどの果物を最後の味付けに使っているような南国特有のものだ。また、日本人が勤勉で何事も深刻に考え、過労死という社会現象が生まれるような国と比較すると、なんとも大らかでゆったりしている。

今回のセミナーは、グローバル金融での労働組合の経験と対応を共有するというものである。私は、そのうち、グローバル金融と合理化がテーマであったが、30分ほどの講演では、どの程度参加者に伝えることができたかは一抹の不安が残った。日本の労使関係の特徴を述べる中で、カイゼンのセオリーを白板に漢字で書いて説明した。通訳のChaiさんが翻訳して、その漢字の下に英語を書いていたのだが、参加者が、真剣にメモをとっていたのは興味深かった。生産性についての理解があまり浸透していないとは聞いていたが、関心はあるようだ。

セミナーが終了した翌日は大型の台風が急接近していたが、UNI-PLCの青年委員会のメンバーとパヤタスを訪問した。ゴミを拾って生活をしている人たちが住む地域だ。

死者200名以上の被害をもたらした台風が吹き荒れる中、給食活動の舞台であるパヤタスの体育館は、豪雨でけたたましい音に覆われていた。1日一食のみであるが、給食を食べに来られる子供たちは、この洪水でここまでたどりつけないのではないかと心配をした。が、10時半過ぎには、20人ほどの子供たちと付き添いの母親たちが集まってきた。サンダルにTシャツなどの簡単な服装であったが、雨に打たれ濡れ落ち葉のようである。その日の食事にも事欠く子供たちに配られていたのは、カレー-ライスであった。夢中で食べる子供たちを遠くから眺めていた母親の1人は、トタン屋根からあふれ落ちる滝のような雨で体を洗っている。昨年パヤタスでは、子供の1人が飢餓で死んだという。また、ゴミの山が崩れて下敷きになって死んだ子供たちもいるという。

この給食活動は、UNI-PLCの活動として2005年に始まり、それが発展して日本の代表団がカンパをするようになった。当初は75人の子供たちの給食活動であった。1日一食を支援する。1日10ペソ(約20円強)になるというが、今は15ペソほどという。UNI-LCJとしても僅かながらではあるが、カンパ金贈呈の支援をした。

フィリピンは、国が豊かになってもこの貧困層はそのままではないかと危惧する。他のアジアの後進国は、貧しさをみんなで共有化し、みんなで耐えて、みんなで明日の希望を探しているような印象があるが、フィリピンは貧富の差が完全に固定し、絶望的な貧しさが存在しているようでもある。

国づくりはリーダーの強固の信念と切迫感のともなった政策こそが不可欠であると思うが、フィリピンでは確固とした将来像は描けているのだろうか。

今後、UNIの活動で連携し、フィリピンにどのような支援の手を差しのべる事ができるのか、いまだ答えがでないままであるが、貴重な体験をすることができた。心より感謝申し上げます。

## 損保労連 中央執行委員長 石川 耕治

UNI-PLC ウマリ事務局長とは、UNI-Apro 金融部門において旧知の仲であることもあり、フィリピンの労組に求められることとして、現在の不安定な労使関係を改善する努力を継続し、労使の信頼関係を構築するべきである点を率直に指摘しました。

あわせて今フィリピンの労働組合に求められるものは、経営に対する労働組合のチェック機能であることも強調しました。

米国発の世界的な金融危機は、世界各国に影響を及ぼしましたが、アジア太平洋地域の UNI 加盟の金融機関は、幸いなことに欧米にくらべると回復に向かう歩みが早いと言えます。しかし、金融危機はいつか再びやって来る。そのためにしっかり対処できるように労使による準備が重要です。来てからでは遅いのです。平時から労使対話の中で雇用セーフティネットを構築し、継続的な企業発展を目指すべきだと考えます。もちろん、そのためには職業訓練の充実、最低賃金を引き上げなど、安定した雇用のため常に配慮することもフィリピンの労働組合に求められています。

今回の共同セミナーは、10 回目となりますが、今後も UNI-PLC の先人の意思を引き継ぎ、UNI の仲間として国際労働運動を支えていく所存です。

またセミナーの翌日に、UNI-PLC のユースメンバーと社会貢献活動に参加しました。

栄養失調となっているスラム地区の子供へ給食配給サービスです。フィリピンの未来を背負う 20 代 30 代のユースメンバーの懸命な活動に頭が下がります。

当日は台風 16 号の影響で大洪水が発生し、マニラ全域が冠水し 412 万人が被災しました。わたしたちの車も使用不可能となり 13 時間をかけ、最後は水の中を歩いて宿泊場所まで戻る事態となりましたがことになりましたが、今回の大洪水 ONDOY で多くの方が亡くなりました。いまだに避難所生活を強いられている方が多くいます。

亡くなった方のご冥福と被災された方の一刻も早い完全復興をお祈りします。

## サービス・流通連合 組織局部長 高橋 貴宏

金融危機後のフィリピンの実情

グローバル金融危機により世界経済が急速に悪化する中、フィリピンにおけるその影響を知る良い機会となった。

その中で、フィリピンにおける銀行業界の話が興味深かった。フィリピンでは、金融危機後の金融部門の破たんはなく、特に銀行は堅調に利益も出ているとのことであった。

なぜなら、多くの規制により、中小の銀行を取りまとめ、強い基盤を持ち、かつ国家が銀行から借入れを行っているためとのことであった。

また、フィリピンから外国へ出て働く、いわゆる「出稼ぎ」労働者からフィリピンへの送金額は、1 カ月平均 12 億ドルあり、これが金融危機での経済の悪化を食い止めた、という話には驚いた。

## 意見交換

UNI-LCJ メンバーの説明を聞いた後、UNI-PLC の参加者一人ひとりから、自分たちの運動はどうあるべきだと思うかを話す時間があった。

大きく分けると、問題意識が高いのは「若年層」「女性」「教育」「パート」「拡大」という分野であった。国と、その国における労組の成り立ちや特性は違えども、労働組合が抱える悩みや、課題として考えていることの根は同じなのだと感じた。

また、説明に対しての質問においても、青年の活動や、女性の労働組合活動への参画の話が出る場面があったことから、次の機会には日本側からも、男性だけではなく、女性の役員の参加があると望ましいと思った。(フィリピン側セミナー参加者 20 名中 9 名は女性だった)

## 長崎大会に向けて

多くの参加者が興味深く話を聞いていた。特に日本での開催の為興味があるのかもしれないが、ぜひ行きたいという声が多かった。

「予算がないからそんなに多くはいけないよ」と諭されるシーンもあったが、長崎大会で UNI-PLC メンバーが世界に伝えたいメッセージを伝えるために必要な人数で、ぜひ参加してほしいと思った。

今後具体的に議論するということがあったが、パヤタスの子供たちを救うための手段や、女性委員会で議論をして何かを作り上げたいという積極的な声が上がっていたことは、今後が大変楽しみだ。

## パヤタスの給食活動

大変興味がある内容であった。子供たちがゴミの中からリサイクルできるものを探し、それをお金に換えて生計を立てている。そんな暮らしの中、食事を普通に口にすることができない子供たちのために、2005 年から UNI-PLC がこの活動をスタートさせた。

今回は、タイフーンの影響で当初集まるはずだった子どもたちが集まることができなくなり、10 名弱の子供たちが集まった。当日のメニューは、野菜を細かくし、子供向けの味付けのベジタブルカレー。(自分も少し頂いたところ、子供が食べやすい、やさしい味だった。) 2~3 歳かな? と思った子供は 5 歳だという。栄養失調のため正常に発育していないということだった。すごく胸が締め付けられる光景だった。

UNI-PLC のこの活動への支援は非常にありがたがられていて、UNI のカンパで半年分の給食代になるとのことであった。

大変意義のある支援活動だとあらためて感じた。

## 全体を通じて

UNI の運動に参加したのは初めてだったが、すべて非常に良い経験をさせていただいたと思う。

金融危機後の他国の実情を肌で感じることができ、その中で労働組合は何ができるのか、何をしなければならないのかを、真剣なまなざしで話を聞き、みんなで意見交換している

姿は、日本での自分たちの姿を振り返る良い機会となった。

また、UNI-PLC メンバーは大変明るく、活発で、エネルギーが豊富だったのが印象的だった。

それは、パヤタス給食活動視察後のマニラ大水害という惨事の時にも感じられた。

途中帰国すら危ぶまれる局面もあったが、全員濁流に流されることなく帰国できたことは大変ありがたかった。

最後に、この場をお借りして、UNI-PLC 参加者メンバー、UNI-LCJ 参加者、UNI-LCJ 事務局の皆様、そして UNI-LCJ 桜田議長に感謝いたします。大変ありがとうございました。

### JP 労組 教育部長 福岡 晃

私自身、国際活動への参加は今回が初めてであり、非常に貴重な経験をさせていただいたことに感謝している。フィリピン・マニラと聞いて、南国・非常に熱い、とイメージを抱いていたが、程よい風が吹き、セミナーの2日間は、思いのほか心地よく過ごすことができた。(逆に、ホテル内の冷房が効きすぎており、内外の温度差に戸惑った)

日本側出席者の講演について、参加者から、組織拡大、労使交渉、男女共同参画、教育活動への質問が多く、関心が高いのだと感じたところである。

また、青年の活動参加、女性労働者の地位向上について議論したが、これらの課題は日本においても共通する部分である。

経済状況で驚いたことは、サブプライム問題については、外資系金融・製造業が影響を受けただけで、大きな暴落・被害はなかったということである。事由として、外国への出稼ぎが多く、フィリピンに住む家族へ送金し内需拡大が図られているとのことだが、言い返せば、国内の企業も一部の企業のみしか発展できずに、雇用の場が少ないことは問題であることを考えさせられた。

フィリピンでは郵便事業は公社であり、現在、民営化計画に直面しているそうだが、来年、大統領選挙があり、混とんとしている状況にあるとのこと。

また、民間参入により需要あるエリアでの取り扱い数が減少しているとの状況を聞き、ユニバーサルサービスの必要性を認識した。

なお、2日間のセミナーと言っても実際に始まってみると時間経過が早く、交流会があれば更に議論も深まったのではないかと思う。

26日は、パヤタスの給食活動に参加したが、台風の被害により、近隣の子供たち10数名しか集まれなかったこと、そして途中で視察を中止しなければならなかったことが残念であった。日本に戻り、最悪の被害であったことを知り驚愕した。今回の参加者の被害など、どうなっているのか気になるところである。

最後に、今回、日本から参加したメンバーの皆さんには、台風の中、共に苦労し、そしてお世話になったことに感謝します。参加者の皆さんと、またお会いできますことを楽しみにしています。ありがとうございました。